**聖霊降臨節第３主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2024年６月２日**

**「御言葉と祈りによって」**

**アモス書9章11～12節**

 **9:11 その日には／わたしはダビデの倒れた仮庵を復興し／その破れを修復し、廃虚を復興して／昔の日のように建て直す。**

 **9:12 こうして、エドムの生き残りの者と／わが名をもって呼ばれるすべての国を／彼らに所有させよう、と主は言われる。主はこのことを行われる。**

**使徒言行録15章１～21節**

 **15:1 ある人々がユダヤから下って来て、「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と兄弟たちに教えていた。**

 **15:2 それで、パウロやバルナバとその人たちとの間に、激しい意見の対立と論争が生じた。この件について使徒や長老たちと協議するために、パウロとバルナバ、そのほか数名の者がエルサレムへ上ることに決まった。**

 **15:3 さて、一行は教会の人々から送り出されて、フェニキアとサマリア地方を通り、道すがら、兄弟たちに異邦人が改宗した次第を詳しく伝え、皆を大いに喜ばせた。**

 **15:4 エルサレムに到着すると、彼らは教会の人々、使徒たち、長老たちに歓迎され、神が自分たちと共にいて行われたことを、ことごとく報告した。**

 **15:5 ところが、ファリサイ派から信者になった人が数名立って、「異邦人にも割礼を受けさせて、モーセの律法を守るように命じるべきだ」と言った。**

 **15:6 そこで、使徒たちと長老たちは、この問題について協議するために集まった。**

 **15:7 議論を重ねた後、ペトロが立って彼らに言った。「兄弟たち、ご存じのとおり、ずっと以前に、神はあなたがたの間でわたしをお選びになりました。それは、異邦人が、わたしの口から福音の言葉を聞いて信じるようになるためです。**

 **15:8 人の心をお見通しになる神は、わたしたちに与えてくださったように異邦人にも聖霊を与えて、彼らをも受け入れられたことを証明なさったのです。**

 **15:9 また、彼らの心を信仰によって清め、わたしたちと彼らとの間に何の差別をもなさいませんでした。**

 **15:10 それなのに、なぜ今あなたがたは、先祖もわたしたちも負いきれなかった軛を、あの弟子たちの首に懸けて、神を試みようとするのですか。**

 **15:11 わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです。」**

 **15:12 すると全会衆は静かになり、バルナバとパウロが、自分たちを通して神が異邦人の間で行われた、あらゆるしるしと不思議な業について話すのを聞いていた。**

 **15:13 二人が話を終えると、ヤコブが答えた。「兄弟たち、聞いてください。**

 **15:14 神が初めに心を配られ、異邦人の中から御自分の名を信じる民を選び出そうとなさった次第については、シメオンが話してくれました。**

 **15:15 預言者たちの言ったことも、これと一致しています。次のように書いてあるとおりです。**

 **15:16 『「その後、わたしは戻って来て、／倒れたダビデの幕屋を建て直す。その破壊された所を建て直して、／元どおりにする。**

 **15:17 -18それは、人々のうちの残った者や、／わたしの名で呼ばれる異邦人が皆、／主を求めるようになるためだ。」昔から知らされていたことを行う主は、／こう言われる。』**

 **15:19 それで、わたしはこう判断します。神に立ち帰る異邦人を悩ませてはなりません。**

 **15:20 ただ、偶像に供えて汚れた肉と、みだらな行いと、絞め殺した動物の肉と、血とを避けるようにと、手紙を書くべきです。**

 **15:21 モーセの律法は、昔からどの町にも告げ知らせる人がいて、安息日ごとに会堂で読まれているからです。」**

**先ほど長い聖書箇所を司式者に読んでいただきました。「エルサレムの使徒会議」と小見出しがつけられているこの聖書箇所は一見すると私たちの信仰生活や教会生活に関係がなさそうに思える箇所です。「私は長老ではないから教会の会議に参加することもないから私には関係のない話」と思われるかもしれません。でも、最初の教会であるエルサレム教会で最初に開かれた会議である使徒会議は、私たちキリスト者がそして教会が何を大切にして物事に取り組んでいくかのとても大切なことが記されているのです。共に御言葉に聴いていきたいと思います。**

**先週共に読んだ聖書箇所では、第一次伝道旅行から帰って来たパウロとバルナバが自分たちを聖霊と祈りをもって伝道旅行に送り出してくれたシリア州のアンティオキア教会に伝道の報告をしたことが記されています。それはただ単にこんな出来事があったという業務報告ではなくて、神様がいつも自分たちと一緒にいてくださり多くの恵みの御業をなして下さった、それは特に異邦人に信仰の門を開いて下さり、その門を通って多くの異邦人が信仰の道へと導かれた、イエス・キリストの十字架と復活の福音を信じる信仰によって多くの異邦人が救われて異邦人を中心とした教会がいくつも誕生したという、いわば恵みの証しをしました。アンティオキア教会はパウロとバルナバの証しを聞いて、皆でその恵みを分かち合っていたのです。「神様はすばらしい。神様はユダヤ人も異邦人も分け隔てなく愛して下さっている。その愛に感謝しよう」そんな喜びの言葉が誰ともなく出てくるような恵みの分かち合いを共に行っていたのです。**

**しかし、そんな主の恵みに満たされたアンティオキア教会に水を差すような人たちがユダヤからやってきたのです。「モーセの慣習に従って割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」これは「異邦人が救われるにはユダヤ人が救いのしるしとして体に刻み付けている割礼を同じように受けなければいけない」という古い考え方に縛られたものでした。このように主張するユダヤ人キリスト者たちは、自分たちは割礼を受けていますので、異邦人も自分たちと同じように割礼を受けたうえで、それはつまり異邦人もユダヤ人になった上でイエス・キリストの十字架と復活の福音を信じることが大切だと訴えたのです。**

**この主張に対してパウロとバルナバは激しく反論するのです。彼らはついこの間まで伝道旅行に行って「イエス・キリストの十字架と復活の福音を信じる者はユダヤ人も異邦人も関係ない。ただ信じるだけでいいのだ」と各地で説教をして周り、多くの異邦人がイエス様を救い主と信じて救われたのを目の当たりにしてきたのですから。彼らは割礼を救いの条件だと思っていませんので、異邦人に割礼を求めることはしませんでした。**

**ですので、「割礼は必要だ」「いいや必要ない」とお互いの主張がぶつかり合ってアンティオキア教会は混乱してしまい、このままではらちが明かなくなったのです。そこで「異邦人が救われるには割礼が必要かどうか」これは信仰の根幹に関わる大切な問題ですので、エルサレム教会の使徒たちや長老たちと協議をするためにパウロたちはエルサレム教会に向かったのです。**

**パウロたちはその道すがら、異邦人がイエス様の十字架と復活を信じて救われた喜びを伝えると、それを聞いたキリスト者たちは同じように喜んでくれました。エルサレム教会に到着して報告したことは「神が自分たちと共にいて行われたことをことごとく」ですので、多くの異邦人が信仰へと導かれた喜びを証しをしたのです。そうすると、かつてのパウロのようにファリサイ派からキリスト者となったユダヤ人キリスト者が数名立って、「異邦人に割礼は必要だ」と主張をしました。彼らはもちろんキリスト教に反対する者ではありません。れっきとしたキリスと教徒なのですが、やはり古い慣習にとらわれて救いというものが、さらにいえば神の愛が見えなくなってしまい感情的に反論してしまったのです。**

**ここでエルサレム教会の使徒たちがこのような主張に同じように感情的に反論してしまったら、お互いの主義主張が激しくぶつかり合ったらアンティオキア教会の二の舞になってしまいます。信仰のとても大切な問題だからこそ6節にありますように「使徒たちと長老たちは、この問題について協議するために集まった。」のです。ここで「協議する」と訳されている言葉は、元の言葉では「見る」です。見るために集まったのです。何を見るのでしょうか。主を見るのです。神様を見るのです。共に主が今この出来事を通して何をなそうとしておられるのかを見るのです。それは神様に御心を問い、御言葉に聞き、共に祈りを合わせて話し合いを重ねていくのです。**

**その上でペトロは立ち上がって語ります。それはかつて自らが経験した異邦人コルネリウスの救いの出来事を通して見た神様の愛の御業を語るのです。「わたしたちは、主イエスの恵みによって救われると信じているのですが、これは、彼ら異邦人も同じことです。」（11節）私たちはユダヤ人も異邦人も関係なくただ主イエスの恵みによって救われている。ただ信じるだけでいいのだ。割礼は必要ないんだと語るのです。**

**ペトロの言葉に続いてパウロとバルナバが伝道旅行で経験した神様が異邦人の間で行われたあらゆるしるしと不思議な業について語りました。さらにヤコブはシメオン（このシメオンはペトロの事）が語ったことと旧約聖書の預言者が語っていることは同じであるとしてアモス書9章11～12節を引用して語ります。御言葉に聞き、御言葉が語っている救いは異邦人にも与えられることを証しするのです。その上で「神に立ち帰る異邦人を悩ませてはなりません」と語り、異邦人が救われるのに割礼が必要ないというペトロの意見を指示したのです。ただ、20節21節では異邦人キリスト者たちはユダヤ人キリスト者たちに対して配慮が必要であることを述べました。ユダヤ人と異邦人が一つの教会で共に主を礼拝し、食卓の交わりを持つにあたって、ユダヤ人が避けていることは異邦人も避けて欲しい。お互いがお互いを配慮し合う中でこそ教会の交わりが豊かにされて、共に主を見上げ共に礼拝をする。そして一つの教会として成長していく、その様子を父なる神様は見ていてくださり喜ばれるのです。それこそが主の御心に適うことであると御言葉に聞き祈る中で示されたのです。**

**今日の聖書箇所を通して神様が私たちに示して下さっている大切なことは、エルサレム教会の使徒たちや長老たちそしてパウロやバルナバたちがこの問題を通して神様は私たちに何をなそうとしておられるのかを共に見たように、私たちもまず神様を見ることです。神様を見上げて、今この出来事を通して神様がこの私に何をなそうとしておられるのかを御言葉に聞いて祈ることです。神様の御心を求めて祈るのです。**

**これが神様の前に正しいことであるという主事主張はあるでしょう。私たちが人生を歩む経験からこれが神様に喜ばれることに違いないという判断もあるでしょう。そして、その判断や経験やさらには主義主張を相手に求めてしまうこともあるでしょう。「これが正しいことだからこの事に従ってね」、そのような思いを相手に押し付けてしまうこともあると思います。でもそうしてしまうと私たちは、異邦人にも割礼を求めたユダヤ人キリスト者と同じになってしまいます。「救われるにはこれが必要なんだ」と神様はそんなことを求めていないのに、神様はイエス様の十字架の死によって私たちの罪を贖って下さり、復活によって永遠の命への道を開いて下さいました。私たちはこのままの姿でイエス様の十字架と復活の愛を信じるだけで救われているのです。ただ信じるだけでいいと信仰の門を開いて下さっているのです。それなのに、私たちの側で勝手に条件を付けたり相手に押し付けたりしてしまうのです。**

**弱い私たちです。弱い私たちだからこそ色んな人間的な思いはあるでしょうけれども、心を静めて神様を見上げるのです。「沈黙しなさい。今神が語りだすかもしれないから。」とある神学者が言ったと聞いたことがあります。私たちは心騒がせてあれこれと話したがります。苦しみの中でどうして私だけがこんな目に遇わなければいけないのか。神様の御心がわからないことが多々あります。だからこそ私たちは心静めて沈黙するのです。主を見上げて、主の御言葉に静かに聞き、主の御心を求めて祈るのです。この朝改めてこのことを心に留めて新しい一週間を共に歩んでいきましょう。**